
バトルスピリッツ 激震の勇者

ブラスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バトルスピリッツ 激震の勇者

【Nコード】

N6404X

【作者名】

ブラスト

【あらすじ】

主人公達が住む町は陽昇マヒルという男が作ったリアルバトルフィールドでみんな楽しくバトルスピをやっていた。だが、その街である少年少女たちを巻き込んだ事件が起ころうとしていた。

バトルスピリッツ激震の勇者 キャラ紹介（前書き）

この話は、今放送中のアニメ「バトルスピリッツ覇王」と所々接点があります。

また、そのバトルスピリッツ覇王のキャラが小説に登場させようと思ってるので是非ご期待ください！

バトルスピリッツ激震の勇者 キャラ紹介

初めまして！ブラストと申します。

今日からバトルスピリッツの小説を書いていきたいと思っています。

私は初心者なので、皆様の小説と比べたら面白みのない小説になるかもしれませんが、温かい目で見守っていただくと嬉しい限りです。

まずは早速キャラ紹介から書いて行こうと思います。

・若槻和人（わかつきかずと）

本作品の主人公。13歳の少年で赤デッキの使い手。

キースピリットの「剣皇龍エクスキャリバス」を相棒と呼び、様々なカードバトラーと戦う。

・木野咲（きのさき）

和人とは幼馴染で、13歳の女の子。

緑デッキを使うが、まだまだバトスピ経験は浅い。

・来道リクト（らいどうりくと）

13歳の少年、白デッキの使い手。木野や和人とは大の仲良し。

昨年ガンスリンガーで川村と戦うが、惜しくも敗れる。

・川村劉（かわむらりゅう）

昨年のガンスリンガーを好成績で通過した13歳の少年。

青デッキの使い手で、粉碎などをメインとした攻めで相手をデッキアウトにさせる。

ただひたすらに強さに拘り、誰かに頼るのを嫌う。

以上4人のキャラ紹介です！

「エクスキャリバス」など少し古めのカードを紹介していますが、
勿論バーストなどの最新カードも話に登場させようと思ってます！

これからぜひよろしくお願いします！

第1話『出会いの始まり』（前書き）

はい！やっとな話が出来！

そして一話目から現在放送中のアニメ、バトルスピリッツ覇王のあのキャラが登場！面白いかどうかは不安ですが、ぜひ見てみてください。

第1話『出会いの始まり』

『メインステップ!』

とあるテレビ画面でバトルスピリッツで対戦している二名の人物が映される。一人は帽子をし、その帽子からはみ出した髪は青色の少年らしき人物。もう一人は白デッキを使っている、金髪の少年。

今の状況は互いのライフが三で白デッキの男の場には機人フィアルLv.2と翼神機グランウオーデンLv.2が一体ずつ。もう一人の場にはグランガッチ、ロックゴレムLv.2が一体ずつ、ネクススは”崩壊する戦線”が二枚のみ、そして第7ターンを迎え、青年のターン。

『マジック発動”マジックドリル”と”マジックハンマー”を使用』

『またデッキ破壊か!』

マジックドリルの効果は相手の手札と同じ枚数デッキを破壊。そしてマジックドリルは相手デッキを5枚破壊。今、相手の手札枚数は5枚、つまりマジックハンマーの効果と合わせて、10枚デッキを破壊される。

『じゃあそろそろ終いだ、オリハルコンゴレムをレベル2で召喚』

『!?!?』

どこからか青い宝石のような物が出現し、それが砕けたかと思うと地面が大きく盛り上がり、そこからオリハルコンゴレムが現れる。

”グオオオオオオオ——ッ！”

『さらにグランガッチと合体（ブレイヴ）させる』

ワニの姿をしたグランガッチがオリハルコンゴレムと一体となり、BPが11000となる。

『行け、合体（ブレイヴ）スピリット』

プレイヤーがアタックを命令したと同時に、スピリットの目が青く光り、次の瞬間、機人フィアルはグランガッチの合体時能力で破壊される。

『ライフで受ける！だが、フラッシュタイミング、デストラクションバリアを使用！これにより転生を持たない合体（ブレイヴ）スピリットを破壊』

オリハルコンゴレムはそのまま突っ込み、飛び上がると同時に大きな爪を振り下ろす。プレイヤーの周りにバリアのような物が展開されるが、オリハルコンゴレムの攻撃の前に簡単に破壊されてしまう。

だが、オリハルコンゴレムが相手のライフを削り、地面に着地したと同時にデストラクションバリアの効果によって破壊される。

『どうだ！』

『？……だからどうした？狙いはライフじゃなくてデッキだけど？』

『なっ！？』

そう言われると同時に自分のデッキを確認するが既にデッキ枚数はゼロ。そしてその後、ターンエンドを宣言し、相手のターンになるが、ドローできなくなった事で負けが確定し、そのまま決着してしまう。

『お、俺の負けだ』

そして次に画面が変わり、アナウンサーの女性が現れる。

『さあ今のが、チャンピオンシップ一回戦の試合です！これが決勝戦と言っても過言ではない試合を展開してくれた青デッキ使いの川村劉選手の対戦動画でした！そして早速彼にインタビューでも――』

続きを言おうとした瞬間、”ブチッ”とテレビの切れる音がする。

「やっぱすごいぜ！バトスピ！」

さっきまでテレビを見ていたその少年はソファを立ち上がり、さっきの映像の感想を言う。彼の名は若槻和人。13歳で彼もまたバトスピが大好きな少年なのだ。

「かつこいいよな、よし！もう我慢できねえ！早速バトスピセンターに直行だぁー！ッ」

すぐさま赤いデッキケースを持つと、玄関を飛び出しバトスピセンターというバトスピ専門の店へ足を急がせるのだった。

——バトスピセンター

バトスピ専門店。それがバトスピセンター。

この店では、たくさんのバトスピカードを取り扱ったり、店中に置かれた台座でバトスピをプレイしているたくさんの人達。

「うおおおおッ！」

和人は店のすぐ目の前まで駆け寄るとそのまますごい勢いで店へと入店する。

「いらっしゃ——って、和人君か」

「おーっす店長！」

「今日は遅かったね、知り合いの咲ちゃんは今とっくに来てるよ？」

「マジ!?!」

和人とは顔馴染みの様子。この人物は村井知恵という名前でバトスピの知識に関しては群を抜くほどで、ここのバトスピセンターの店長をしているらしい。そして村井の言う咲とは、和人の幼馴染の女の子、木野咲のことだ。

「あつ、和人！どうしたの？遅かったじゃない」

「おお！実はバトスピニュース見ててすっかり遅れちゃって」

「はあ、和人らしい。まあ、さっさとバトルしない？」

「いいね！俺のデッキと早速バトルだ！」

そんな会話をしながら二人は台座にデッキを置き、バトスピの対戦を始める。

——10分後……。

「はい、ガブノハシでアタック」

「ら、ライフで受ける」

最後のライフが削られ、和人の敗北が確定。

「はあ、まだバトスピ経験浅い私に負けるなんて」

「しょ、しょうがないだろ！今のは手札回りが悪かったんだ！フレームサイクロンとかバスタージャベリンが来てれば！」

「前はそれを加えた手札で、レイニードルやディノニクソーが来ればとか言ってた？」

「うっ！」

ちなみに言つとこれまでの二人の対戦成績は10戦中で木野が6勝4敗、和人が4勝6敗。

経験で言つと和人の方が上なのだが、実力はまだ初心者同然の木野より若干下。簡単にいえば、まだ彼は実力的に十分ではないという事だ。

「まあ、もしかして私がバトスピ経験があるのかな？」

「くそぉー！」

もう一回と頼みこもうとする和人。だが、彼がそのお願いをする前に突如周りの人達から「おおー」という声が聞こえてくる。

「！、やだ、今の勝利はまぐれなんですってば」

「おい木野、言っとくけどお前じゃないらしいぜ？」

「えっ？」

ふと後ろを見ると、そこでは髪型がアフロでサングラスをかけた一人の男性が既に何人共バトルし連勝しているからだ。

『すげえよ、もうこの人10連勝中だ』

『戦ってみたいけど、俺じゃあ手も足も出ないんだろっな』

観戦している何名かの声が聞こえてくる。

それを聞いていた和人はデッキを持ち、その人の所に歩み寄る。

「さあ、次の対戦相手は誰かな？誰でも受けて立つよ？」

「はい！はい！！はい次、俺やります！」

「おお、いいよ！君の名前は？」

「若槻和人！おじさんは？」

「俺の名は、人呼んでアフローヌ！さすらいのカードバトラーさ！」

自信満々な様子で決めポーズを決め、名を名乗るアフローヌと言う人物。

「アフローヌ？ま、まあともかく！早速バトルお願い！」

「おっと、ちょっと待って。君さっきそちらの女の子とバトルしてたよね？」

「ええ？まあそうですね」

アフローヌと言う人物は木野を示しながらいい、その言葉に和人は頷く。

「その対戦を見てふと思ったんだが、少し君のデッキを見せてくれないかな？」

「ああ、はい」

言われるままに和人はデッキをアフロウヌに渡し、デッキを見てもらう。

「ふうん、ロケラトプスやディノニクソーの軽量スピリットにフレ임サイクロンやトライデントフレアの除去系マジックがあるのか」

「ど、どうですかね？」

「確かに君のデッキはイイ感じだけど、もうひと押し足りないね」

「どついう事ですか？」

「赤は本来攻めることが最大の基本だ。だけど、君のさっきの戦い方を見て思ったが、君はどちらかというと守りの向けの戦い方をしていたね」

「ええ、中々BPの強いスピリットがなくて」

「ふうん、どうやら君のデッキには運命の一枚がないらしいね」

「？」

「ただカードの効果がいいとか、見た目がいいという理由じゃなくて、自分が心の底から何かを感じたカード、それが運命の一枚だ！」

「運命の、一枚」

「よかつたらカードを購入してみたらどうだい？少しの間待ってあげるよ」

「はい！」

すぐさま駆け出し、商品の棚にあるブースターパックを見る。

『どうだい？どれを買うか決まったかい？』

「少し待っててくださいーい！」

大きな声で返事をするも、全部で14弾もあるブースターパックのどれを買うか中々決められずに迷っている状態だった。

「あれ和人君？カードを買うのかい？」

「あつ！店長。まあね」

「へえ、でもどれを買うか悩んでるようだね。まっ、じっくり選んでよ」

「はい！つて、店長それは？」

和人はふと知恵の持っている一つの箱が気になる様子。

「ああ、第7弾のパックが切れたからね、在庫から持ってきたのさ」

「へえ、確か第7弾つて、どんなカードがあるんでしたっけ？」

「ええ」と、確かメテオヴルムやビャクガロウとか、アレクサンダーとかかな？」

「うーん……」

「あれ？もしかしてこれが気になったの？」

「ま、まあそんなところです」

「へえ、じゃあ少しお安くしてあげようかな？」

「いいんですか！」

「どうする？これにする？」

「はい！」

お金を渡し、知恵から第7弾のブースターパックを受け取る。

「よし！じゃあバトルしに行ってきます！」

・
・

「中身確認しないの！？それに後少し待てば例のあれがもうすぐ――」

続きを聞く事なく和人はアフローヌが待っている場へと急ぐのだった。

「おじさん！カード買ってきましたよ！」

「随分早いね。早速開封したらどうだい？」

ゼエ、ゼエと荒々しい息を一通り整えると、和人は直ぐにそのパックを開封する。

「そのパックは第7弾か。いいカードが当たるといいね」

「はい！」

開封後、中身のカードを取り出し一枚一枚をじっくり見つめる。
そしてその中の一枚に和人はふと氣に取られる。

「このカード……！」

「どうだい？いいカード手に入った？」

「はい！何だかさっきおじさんが言ってたみたいにビビッと感じました！」

ブースターパックの中にあつたうちの一枚、「剣皇龍エクスキャリバス」というカードを取り出しながら言う。

「へえ、中々いいカードじゃないか」

「はい！俺、早速こいつをデッキに入れてぜひ勝負お願いします！」

「いいよ！じゃあ早速始め——」

『おゝい！和人君！！』

バトルを始めようとした矢先、それを止めるかのように知恵が現れる。

「店長！どうしたの？」

「ハア……ハア……どうしたのって、今日はあれが届くって前から言ってたでしょ？バトルするならそこでどうかなって」

「？」

「ああー！確かこの店でもついにあれが届く日だったね」

アフロー又は何かを思い出したかのように言う。

「あれ？」

「和人、陽昇マヒルって人知ってる？」

「ううん」

首を横に振りながら和人は答え、それに木野はあきれた様子だった。

「あのね、陽昇マヒルはリアルバトルフィールド、つまり人類最大の発明をした人でしょ？」

「ああそう言えば！確かこの店でも！」

「そう、そのバトルフィールドがこの店でも設置されるのよ」

「そうだった、そうだった！リアルバトルフィールド、俺ぜひそこでバトルしたいと思ってたんだ」

「そうか」

その言葉を聞いたアフローヌは笑みを浮かべながら口を開く。

「だったら、今から僕とやる試合はそこでしないかい？」

「えっ！」

「君も運命のスピリットを手に入れたようだし、大迫力のフィールドでスピリットと会いたいだろ？」

「はい！ぜひお願いします！！」

「そう言う事なら、ぜひこの店のフィールドで戦う第一号として頑張ってね二人とも！」

「「勿論！」」

それだけ言うと、二人はステージの前まで行き、他の観戦者達はステージの横にあるモニターを必死に眺める。

「じゃあ、二人とも、あのセリフは言えるよね？」

「勿論！行くよおじさん！」

「ああ、それじゃあ始めるか！」

「ゲートオープン！開放！！」

二人がその言葉を放つと、光に包まれ二人はその場から消え、リアルバトルフィールドへと移動するのだった。

第1話『出会いの始まり』（後書き）

いかがでした？ 第一話！

和人「何か色々駄作だけだな」

木野「まっ、次からは頑張つてよ」

頑張るからさ、批判はやめようね。

次回は主人公の第一バトル！ぜひご期待ください！

ちなみに今回はアニメでも登場したアフローヌが登場！ 今後もアニメキャラが登場するかもしれませんがぜひよろしくお願いします。

第2話『剣龍皇エクスキャリバス爆進!』（前書き）

はい、お待たせしました！バトルスピリッツ 激震の勇者、第2話の公開です！相変わらず文章力がなく、面白いかどうかは不明ですが、一目見ていただくと嬉しい限りです。

第2話『剣龍皇エクスキャリバス爆進!』

「おお！これがバトルフィールドか〜！」

大迫力のステージに立ち、興奮気味の和人。

「感動してるとこ悪いけど、早速始めないか？」

「あつ！はい！行きますよ、おじさん！」

先行は和人からで、試合は始まる。

「スタートステップ！」

和人の言葉に反応するかのように台座が光り、その後ドローステップを行い一枚ドローステップ。

和人の手札4枚↓5枚。

「行くよ！メインステップ！ディノニクソーをLv・2で召喚！」

コスト1のディノニクソーに3コアを乗せて台座に置くと、ルビーの宝石がどこからか現れ、それが砕けると小さな恐竜、ディノニクソーが現れる。

「ウォーッ！すっげー！！すっげー！！ディノニクソーがこんな目の前に！」

「そうか、君は確かスピリットを間近で見るのは初めてだよね？初のスピリット召喚の感動は確かに分かるよ」

「はい！こんなにリアルなディノニクソーを見て感激です！」

「はは、その気持ち確かに分かるよ。さあまだ君のターンだ。続けてくれ」

「ええ」と、俺はこれでターンエンドです」

第2ターン。

アフローヌはスタートステップを行った後、コアステップとドローステップを行う。

アフローヌ手札4枚↓5枚 コア4個↓5個。

「メインステップ！さあ今度は俺の番だ。リユザードを二体召喚！内一体はLv・2だ」

さつきデイノニクソーが現れた時と同じ要領で、ルビーの宝石が二つ出現し、それが砕けると二体のリュザードが出現する。

「行くぜ、アタックステップ！Lv・2のリュザードでアタック！ここでリュザードのアタック時効果発動！」

・リュザードLv・2のアタック時効果。
自分の赤のスピリット一体につき、BP+1000。

「俺の場合には二体の赤スピリット、よってBP+2000で4000だ」

リュザードの周りに赤い波動が集まり、リュザードのパワーが高まり、そのまま和人へと突っ込んでいく。

「（BP4000じゃ、デイノニクソーでブロックしても相討ち。無闇にデイノニクソーを破壊される訳にはいかない。ここは……）」

「さあ、この攻撃はどうする？」

「ライフで受けます！」

和人の周りにバリアが展開され、そのバリアにリュザードが真正面から突進し、そのバリアを砕く。

”パリーンッ！”

「痛あッ！！」

和人残りライフ5↓4。

ライフで受けるとそれなりの衝撃がプレイヤーを襲い、後ろに後退させられる。

「大丈夫かい？」

「つつ……まだまだ！この痛みが次のチャンスにつながるんですから！」

和人の言葉と共に、リザーブにさっきライフで受けたコア一つが置かれる。

「OK、中々いい気合だ！まだまだ勝負はこれからだね！」

「はい！」

「じゃあ、俺はこれでターンエンド」

第3ターン。

和人はスタート、コア、ドローステップを行う。
手札4枚↓5枚　コア5個↓6個。

「メインステップ！ディノニクソーをレベルダウン！」

ディノニクソーからコアを二個リザーブに戻し、それによりディノニクソーはLv・1となりBPは1000と、パワーダウンする。

「さあ一気にいきますよ！レイニードル！アンキラーザウルスを召喚！」

レイニードルとアンキラーザウルスどちらにもコアを二個ずつ置いた後、二つのルビーが出現し、それが砕けると、レイニードルは突如現れた雷雲から、アンキラーザウルスは地面を突き破るようになて現れる。

”ガアアアアアアアア——ッ！”

レイニードルとアンキラーザウルスの二体の咆哮がフィールド中に広がる。

「ううっ！レイニードル、アンキラーザウルス！やっぱかったいい！」

新たな二体のスピリットを見て、さらにテンションが上がる和人。

「低コストスピリットを並べて場を固くする。中々いい戦い方だよ」

「はい！それじゃ行きますよ！アタックステップ！さっきのお返しにレイニードルとアンキラーザウルスでアタック！」

アタック宣言と共にアンキラーザウルスとレイニードル、二体の龍がアフローヌに突っ込んでいく。

「ふっ、どちらもライフで受けるよ」

アンキラーザウルスは尻尾のドリルを回転させて起こったトルネードを、レイニードルは口を大きく開いて光線をそれぞれアフローヌに放ち、周りに展開されたバリアを簡単に砕く。

”パリーンッ！”

「ッ！中々効くね」

痛みを喰らいつつも、笑みを浮かべるアフローヌ。

二体のアタックをライフで受けた事によってライフは3に減ったが、コアは7個に増える。

「俺はこれでターンエンドです」

第4ターン。

スタート、コア、ドローを行い手札は4枚、コアは8個に増え、その後リフレッシュステップを行い、疲労しているリユザードが回復する。

「さて、メインステップ。こっから俺のターンと行かしてもらっよ」

「はい！」

「カグツチドラグーンをLv・2で召喚！」

炎に包まれた竜、カグツチドラグーンが姿を現し、力強い咆哮を上

げる。

「さあ行くよ！」

「！」

「アタックステップ、カグツチドラグーンでアタック！」

アタック宣言をすると、カグツチドラグーンは翼を羽ばたかせ、和人へと迫っていく。

「（次のターンを考えると、ライフで受けた方がいいな）ここはライフで——」

「いや、君は必ずブロックしないといけない」

「えっ？」

「カグツチドラグーンは【激突】の効果を持ってるからね」

「しまッ！」

・【激突】効果説明

このスピリットのアタック時、相手は可能ならば必ずブロックしなければならぬ。

「さらにカグヅチドラグーンのアタック時効果で俺は1ドロー」

「くっ、アタックはディノニクソーで受けます」

”ギャオオオオオオオオオ——ッ！”

カグヅチドラグーンは咆哮を上げながら、ディノニクソーに向かって火炎放射を放ち、ディノニクソーも自分の火炎放射で迎え撃つが、BPは圧倒的な差で、すぐにカグヅチドラグーンの火炎放射に押されて、火炎放射を浴び、ディノニクソーは倒れてしまう。

「！」

「さらにリユザードLv.2でアタック！」

「ライフで受けます！」

「ふっ、フラッシュタイミング！マジック、フレイムダンスを使用！」

相手がライフで受けるのを宣言したと同時にフラッシュタイミングでカードを使用。

「マジックカード!？」

・フレイムダンス効果説明

相手のBP4000以下のスピリットを一体破壊。

「不足分のコストはカグツチドラグーンをLv・1にして確保。そしてマジックの効果でアンキラーザウルスを指定する」

「そんな!？」

アンキラーザウルスの足元に炎が現れ、その炎でアンキラーザウルスを破壊されてしまう。

「そしてリュザードのメインアタック！」

リュザードが突っ込み、ライフを砕けれ、後ろに弾かれる。
和人残りライフ4↓3。

「うぐっ！」

痛みが和人を襲うも、コアは7個に増える。

「うつ……」

「俺はこれでターンエンド」

——第5ターン。

「強い！だけど、このほうが俺はテンション上げ上げだあ！」

「へえ、君みたいな子、どこかで見た気がするよ」

「ん？」

「嫌、何でもない。続けてくれ」

「はい！」

スタート、コア、ドローステップ後、手札は4枚、コアは8個。
そしてリフレッシュステップ後、レイニードルは回復。

「行きますよ、オヴィラプトとサーベカウラスを召喚！」

オヴィラプトとサーベカウラスが現れる。

「さらにマジック！エクストラドローを使用！」

「手札増強系マジックか」

・エクストラドロー効果説明

デッキから二枚引いた後、三枚目をオープンして赤のスピリットカードなら手札に加える。

二枚引いた後、一瞬和人の眼が変わり、それをアフローヌは見逃さなかった。

「（あの内の二枚カード、一体？）」

そしてその後三枚目をオープン、しかし来たカードはマジックカードのドラゴンズラッシュのため、手札に加えられない。

「これでターンエンド」

「あれ？何もしないのかい？」

「今は守りを固めるのが優先ですから」

「さっきの戦いと一緒じゃないのかい？」

「鎌掛けようとしても無駄ですよ。状況判断して俺が選んだ結果です」

「なるほど、いい目だ。じゃあ君が選んだ結果がどうなるのか俺のターンで分かる」

第8ターン。

アフロー又はメインステップまでの準備を進め、手札は4枚、コアは9個に増える。

「（さてここからだが、相手のスピリットはレイニードールLv.2、オヴィラプト、サーベカウラスLv.2が一体ずつ。だが注目すべきところはあの子の手札にある）」

アフロー又は和人の手札を覗む。

「（さっきのエクストラードローで引いた二枚のカード、その内一枚はキーカードとなりうる高コストスピリットと見た。だから次に引くカードであるドラゴンズラッシュと組み合わせてのコンボを狙う。ならばその前にこのターンで決着をつけないければ）」

自分の手札を見て、アフロー又は笑みを浮かべる。

「メインステップ！リユザードをレベルダウン。さらにオードランを召喚」

コスト0のオードランが小さな翼をはばたかせながら地面に降り立つ。

「さあ行くよ！こっからが本番、覇龍ヴァダンライザーを召喚！」

「！？」

大きめのルビーが出現し、それが砕けると地面を突き破るように覇龍ヴァダンライザーが現れる。

「不足コストはオードランから確保」

オードランから一個は取り除かれ、オードランは破壊。

「さあ、覇龍ヴァダンライザーの召喚時効果発動！」

・覇龍ヴァダンライザーLv.1、2、召喚時効果。

このスピリットの召喚時、相手のBP3000以下のスピリットを全て破壊する。

「っ、つまり！」

「そう、君のオヴィラプトとレイニードルは破壊だ」

”グオオオオオオオオオ——ッ！”

覇龍ヴァダンライザーは炎を纏わせた腕を地面に叩きつけ、レイニードルとオヴィラプトの足元に火柱が立ち、それにより二体は破壊されてしまう。

「！」

「これで君のブロッカーはサーベカウラスだけ。行くよ、アタックステップ！覇龍ヴィダンライザーとリュザードでアタック！」

「！、ライフで受けます」

リュザードの突進とヴァダンライザーの拳が決まり、残りライフは1つとなり、コアは10個。

「まだまだ行くよ！カグツチドラグーンでアタック！効果で一枚ドロ、さらに【激突】発動！」

「サーベカウラスでブロック」

サーベカウラスは受けて立つ素振りを見せ、こちらに向かって来るカグツチドラグーンを見る。

「フラッシュタイミング！グレートリンクを使用！」

「！？」

・グレートリンク効果説明。
自分のフラッシュにあるコアすべてを、【覚醒】を持つ自分のスピリット一体の上に置く。

「コストはリザーブから確保し！このマジックで使用した2コアを、さらに第7ターンで使用した4コア、計6コアをサーベカウラスの上に置き、Lv.3にアップ！」

「！、これじゃあカグツチドラグーンは返り討ちか」

カグヅチドラグーンの放った炎をサーベカウラスはジャンプで交わすと、カグヅチドラグーンに取り付き、爪をカグヅチドラグーンに突きたて、爆発が起こり、サーベカウラスはその爆風から飛び出して、和人のフィールドに戻る。

「だが、まだ俺のアタックは終了してない。リュザード！行け！」

「こつちもまだだ！フラッシュタイミング！フレイムサイクロンを使用！コストはサーベカウラスから使用！」

・フレイムサイクロン効果説明
BP5000以下の相手スピリットを一体破壊する。

「これによりリュザードを破壊！」

「！、まさかこの攻撃にカウンターをぶつけてくるなんてね」

「へっへ！どんなもんですか」

炎の竜巻にリュザードは吞まれ、破壊される。
これ以上は何もできないため、アフローヌはターンエンド。

—— 第9ターン。

「行くぜ！」

メインステップまでの準備を進め、手札は二枚、コアは11個。

「サーベカウラスをLv・1にダウン！」

「相手の手札は二枚、それでどうする気だい？」

「まだまだ！マジック、エクストラドローを使用！」

「！、手札増強系マジック、まだ仕込んでいたとは」

「二枚引いて、三枚目をオープン！そのカードは……」

そのカードを見て、和人は笑みを浮かべる。

「三枚目は剣龍王エクスキャリバス！」

「!?、ここで来たか……君にとって運命の一枚」

「このターンで決めて見せます！レイニードル、ロケケラトプスを召喚！そして、サーベカウラスを【転召】！」

・【転召】効果説明。

条件を満たしたスピリットのコアを指定場所に置いて、召喚できるスピリットの事。

サーベカウラスが赤い炎に包まれ、その炎の中に一つの影が……。

「炎纏いし龍の皇！剣龍皇エクスキャリバスを召喚！」

その影は炎を振り払い、火の粉でその身を輝かしながら力強い咆哮を上げる。

「うおおー……ッ！出たぜ！出たぜ！俺の運命のカード！エクスキャリバス！」

”グオオオオオオオオ——ッ！”

「なるほど、確にかっこいいドラゴンだな」

「さあ、まずはこいつの召喚時効果！」

・剣皇龍エクスキャリバスLv.1、2召喚時効果。
このスピリットの召喚時、BP合計6000分になるよう相手スピリットを好きなだけ破壊する。

「これにより、おじさんの場に居るヴァダンライザーBP4000とリュザードBP1000の二体を破壊！」

”グオオオオオオオオ——ッ！”

翼を羽ばたかせ空へと舞い、そのまま回転して自身の体に炎を纏わせてリュザードとヴァダンライザーに突っ込み、破壊する。

「！」

「そしてアタックステップ！剣皇龍エクスキャリバスでアタック！」

ヴィダンライザーとリュザードを破壊し、相手の場を一掃しただけでなく、このターンでエクスキヤリバス、レイニードル、ロクケラトプスでアタックすれば和人の勝利が確定する。もう目の前にある勝利を確信し、和人は笑みを浮かべる。

だが、アフロージュの実力はまだそんなに甘いものではなかった。

「フラッシュタイミング！」

「!？」

「マジック、ヴィクトリーファイアーを使用！」

「そ、そのマジックって!？」

・ヴィクトリーファイアー効果説明。
BP3000以下の相手スピリット、二体を破壊。

「これにより君のレイニードル、ロクケラトプスを破壊する！」
フィールドに突如Vの形をした炎が現れると、その炎はエクスキヤリバスのすぐ隣を突き抜け、後方に居るロクケラトプスとレイニードルを破壊する。

「嘘!？」

「エキスカリバスはライフで受ける」

エキスカリバスの炎を喰らい、残りライフは二つ。

「お、俺はこれでターンエンド」

第8ターンのカウンターをまさかのカウンターで返されてしまった和人。

これによりただ勝利を逃してしまっただけでなく、ブロッカーさえも残せなくなってしまったのである。

「じゃあ俺のターン」

コアステップ、ドローステップを行った後、自分の手札を見る。

「どうする？まだ続ける？」

「当たり前じゃないですか！フィールドに立ったら最後まで戦います」

「よく行った。それじゃあ続けようか」

手札の内、一枚に手を掛ける。

「君の相棒を見せてもらった礼に、俺も相棒を見せてあげよう」

「！」

「燃え上がれ赤き龍！熱く！激しく！魂の雄たけびを今ここに！！
霸王（ヒーロー）×レア、龍の霸王ジーク・ヤマト・フリードを召喚！」

突如雷雲が現れ、その雷雲に穴が開いたかと思うとそこから一体の龍が舞い降り、赤き炎に包まれた剣を握りしめ、後ろの雷鳴をバツクに唸りを上げる。

”グオオオオオオオオオオ——ッ！”

「こ、これが……龍の、霸王」

「終わりにしよう、アタックステップ、ジークヤマトフリード！決着をつけるぞ！」

「！……ラ、ライフで受けます！」

最後のライフをヤマトは赤き剣を振り下ろして砕き、ライフが0になつたため、勝負がつく。

「いい勝負だったよ、運命の一枚に出会って君のデッキも進化したようだね」

「はい！ありがとうございます！」

試合を終え、バトルフィールドから出てくる二人。

そしてそんな二人の試合を見て観戦者達は、祝福の声を二人に送る。

「でも惜しい事を言うと、君はドラゴンズラッシュを使えずにいたね」

「え、ええ」

「まだまだ君のデッキも君自身も成長する。もっともっと頑張るんだよ」

「はい！」

「よし！じゃあ君の成長を記念して、これを送ろう」

「？」

アフローヌから一枚のカードを渡され、それを見ると、それはさっきの試合で使っていたヴィダンライザーだった。

「！？、いいんですか？Mレアなのに！？」

「いいんだよ。僕より君の方がそいつを存分に力を引き出せるし、なにより君のキースピリット、エクスカリバスと相性がいいはずだ。ぜひこれからも頑張ってよ！」

「はい！ありがとうございます！」

「よし、それじゃそろそろおじさんも行かないとな。今日は君みたいな強い子にもたくさん会えたし、またちよくちよくここに遊びに来るからその時はよろしくね」

「「「はい！」」」

その場に居た全員アフロヌに返事をする、アフロヌは笑顔でその場を後にした。

「よかったね。和人！強力なスピリットが手に入って」

「ああ！ヴィダンライザーが手に入ったのも嬉しいけど、何より俺の運命のカード！エクスカリバスと出会えたのが何より嬉しいぜ！」

「じゃあもつともつと強くならないとね！」

「ああ、今日は負けたけど、今後はもつとこいつの力を引き出して絶対勝つぞーッ！」

次こそ絶対に勝つという意思表示をしながら、その店を後にする和人と木野であった。

第2話『剣龍皇エクスカリバス爆進!』（後書き）

どうでしたか？第二話！

和人「俺の運命の一枚、エクスカリバス初登場の回だ!」

木野「運命の一枚、私も手に入りたいな」

和人「やっぱりバトスピは最高!まだ始めてない人もぜひ始めて欲しいぜ!」

木野「ルールについては『バトスピルール』と検索!」

和人「説明については他人任せ何だな」

木野「そんな事とはかく!次回もよろしくね!」

和人「お、俺からもよろしく!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6404x/>

バトルスピリッツ 激震の勇者

2011年11月17日19時14分発行